

四月二十四日(月)

「なあくんか最近、可愛くないね」

四人掛けの席で目の前に座った沙綾さんは、赤のハウスワインが届くなり早速喉を湿らせて私に言った。あまりに唐突な言い方に、水を入れてきたグラスを落とすそうになる。

「そうですか？」

彼女は頷いた。

「前は違う意味で可愛くなかったけど、それが無くなったかな……」

沙綾さんの言いたいことがイマイチ飲み込めず、一人でジッと考え込んでいると、彼女は運ばれてきた辛味チキンをパパッと二つ食べてしまった。「嗚呼っ」と思っている間に、例の魔法の粉をササッと塗ってしまう。

相当残念そうな表情でじつと見つめていたらしく、沙綾さんには珍しく「あら、ごめんなさい」と頭を下げた。彼女は呼び出しボタンに手をかけながら、「もう一つ頼む？」と訊いてくれた。それに首を横に振って応えたのに、彼女はボタンを押した。呼び出された店員さんに白のグラスワインを頼み、空きのグラスをついでに下げてもらおう。

店員さんがテーブルを離れるのを見守ってから、沙綾さんは私の目をジッと見る。

「で、哲朗がどうしたって？」

彼女は頬杖をついて、つまらなさそうに言う。取り繕った返事をして、彼女は「そういうの、いいから」と取りつく島もない。「欠席裁判が嫌なら、本人呼んじやう？ もう、仕事も終わってるんでしょ？」

容赦ない詰めっぶりに、自然とあうあうしてしまふ。いつもながら、この人強い。一兄、こんな人と同棲してるなんて、凄すぎ。などと、この場にいない人のことを褒め称えている暇なんてない。

さっき二人でZサイズの事務所を出る時にはいなかったから、哲朗さんは今頃、駅の向こうの学生マンションに帰っているはず。呼び出したってすぐに来れる距離だけど、なんとなくメッセージは送りたくない。

「呼べない理由が何かあるのか。なるほど……」

スマホをチラッと見たのがバレたらしい。沙綾さんは新しくテーブルに届いた白ワインをゆつくり味わっている。しつかり口の中で転がしてから、飲み込んだ。テーブルには、マルゲリータやらパスタやら運ばれてくる。彼女は店員さんに愛想良く「ありがとう」と言うと、早速パスタをフォークで巻き上げた。私はピザカッターを握って、歪な円形に下手くそな切れ込みを入れていく。沙綾さんはパスタを一口食べ、ワインを飲んだ。彼女はフォークを持ったまま、私の方を見る。

「コレ食べたら、私、帰っちゃうけど」

「えっ、あ……」

彼女の宣言に不意を突かれ、言葉が出てこない。相談したいことも色々あったのに、考えがまとまらない。

「帰る前に、突撃しちゃう？」

彼女は悪い笑みを浮かべながら、ワインを飲む。

思い切って突撃？ それも悪くないような。少なくとも、夕方に見た光景は拭えそうな気がする。私は不器用に切り分けられたピザを口に運んだ。

「私も一口、もらっていい？」

沙綾さんは、私が「どうぞ」という前に、スッと小さめの一切れを持って行った。彼女はニヤニヤしながら、ピザとワインのマリアージュを楽しんでいた。

初出 令和三年五月八日 noteにて公開